

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	袖廼零：和歌：文苑
Author(s)	蘆月，愁郎
Citation	龍南會雜誌， 6 8： 3 7 - 3 8
Issue date	1898-11-09
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5170
Right	

坐に歸りて各美酒を酌み佳菓を喫し且つは諸氏の厚意に感じ且つは今日の榮を悦ぶ既にして潮漸く干ければ遺憾ながら漕艇を止め艇は水上警察署に預けられぬ歡迎の人々亦漸く散じ日も亦漸く西天に傾けり衆皆欣然として快談豪歌興未だ盡さざるも愛を割きて皆佐賀に向ふ或は父母兄妹の恙なき顔を以て喜ぶもあるべく或は親戚朋友の宅に一夜の夢を結ふもあるべしこゝに先づ遠航の一段落はつきぬ

新文苑

和歌

袖廻雫

蘆月愁郎

山の麓の雨の日の雨いみじうふりければよめる

舟の雲も袂にかきくらしをやみもやらすふる涙かな

涙さへかわくまもなき衣手になはもつれなき五月雨の空

秋立ちしころ基紀君の祖母君うせ給ひぬと聞き待

待立き

君故きを藤の衣をふきてしていとし身にしむ秋の初風

大方はすゝしとめつる秋風のあたにも吹くか君か袂に
秋立と淺茅もいまたしら露の君が袖にそまつは置らむ

またほとへてわが先きの歌の師淺野輝之大人のう
せ給ひければ

君ををしむ涙は雨どふるよはにかさねの虫もねをのみそなく
益城野のうたのあらす田おれにけりかへすくも君をしと思ふ
山の端にわれて入ぬる弓張の月ふさかへせ天の河風
朝露とさえてし君か玉の緒の思ひみたれてちる涙かな
立かへりよに二たひは出こねはいとをしまるゝ山のはの月
杣人のかしく飯田の山の端に立つやけふりと消えし君はも

漢 文

自序

元和偃武、自徳川氏興、諸侯述職于荏都、二百七十年于此矣、此間人士之踐東海往來
者、羣繁如織、富岳也、堰水也、鎌倉也、伊勢也、若西京、若浪華、於神社於佛閣、名區勝地、文
以叙其行跡、詩以寫其景致、筆而傳者、蓋亦不爲尠矣、是以世人詳其風士民俗、猶於吾
閩里然、苟如是、則此篇屬陳腐、類濫吹、豈非供之蠹魚、則卑之飢鼠、然今日風俗、與徳川
氏之風俗、背馳、封建形勢、與王政之形勢、異觀矣、況火輪船馳於水、蒸氣車走於陸、古人